

児童の虐待 Ⅲ

——ネグレクト虐待を中心として——

森 田 喜 治

1 はじめに

児童の虐待 Ⅰ（龍谷大学教育学会紀要 2 号 2003）では、身体虐待について、児童の虐待 Ⅱ（龍谷大学論集 第467号 2006）では性的虐待についてのべた。このシリーズのⅢは以前の論文で述べた虐待のスタイルとはその性質を異にするネグレクトについて事例を通して述べる。

ネグレクト以外の虐待は特殊な問題のある関わり方について冠された名称であるのに対し、ネグレクトが関わりの拒否あるいは怠慢についての問題である点で違いがある。その関わりのない状況下で子どもが他の虐待では見られない特徴的な問題行動を持つ場合をいう。しかし、ネグレクトを親や養育者からの養育の拒否を中心に行っているとはいえ、乳児が全く養育がなされないまま放置されていたなら、子どもはその命を永らえることができず、すでに命を失っている可能性が高くなる。しかし、少なくとも、児童養護施設に入所する子どもたちは命を永らえ、しかも親のかかわりがなかったとされている子どもでも、彼らは職員に対して愛情を求め、対人関係を求め、さらに抱っこや自分への密接な関わりを求める姿が観察される。これらは、彼らが、早期に全く関わりがなく、放置された存在であるとは考えにくい。むしろ、初期のころの母親との肯定的なかかわりはある程度存在し、不足しているとはいえ、子どもは基本的な人間に対する興味や、愛着の感覚を持ち合わせていることが想像される。スピッツはその著書「母子関係の成り立ち」（Spitz, R. A. 1949）の中で、戦争孤児として病院に入院してきた乳児に対して「抱くなどの身体接触が与えられなかったとき、子どもはミルクを拒否し全身衰微（マラスムス）の状態に陥り、命を維持することができなくなることで、あるいは、たとえ生き残ることができたとしても *anaclitic depression* の状況に陥ることで、目がうつろになり、表情がなくなり、他者と一切関わりをもとうとしない特徴的な抑うつ状態

に陥ることになり、ほとんどすべての子どもが何らかの障害を持つか、あるいは、命を落とす結果となることを報告している。スピッツの報告に比べると、児童養護施設、あるいは乳児院に措置されてくるネグレクト虐待の子どもはそれほどひどい状態に陥っているわけではない。これらの状況をみると彼らが全くかかわりのない状態に放置されたわけではないことがわかる。しかし、時折、乳児院から措置されてくる子どもたちにあたかもネグレクト虐待を受けたかのような特性をもって児童養護施設に措置されてくる子どももいる。しかし、その子どもたちの多くにはネグレクト虐待を受けたという記録はない。これらは、かつて hospitalism とされ、施設入所、病院の長期入院を強いられた子どもたちに見られる特性であるといえよう。それは長期の親とのセパレーションが原因して、hospitalism に陥っただけではなく、たとえ家庭の親の養育をうけていながらも、hospitalism 様の行動を起こすことが観察され、maternal deprivation の状況に陥り、発達の、情緒的問題が出現する。そのための様々な問題が出現することが Boelby, J. は実母との関係にのみ注目しているが、それに対して Rutter, M. はセパレーションそのものが maternal deprivation に即つなげるものなのではなく、環境として母性的環境を子どもに提供してやることによって、例えセパレーションの状況にあったとしても、deprivation になるわけではないことが述べられ、Rutter, M. の考え方は、児童養護施設でのかかわりが十分に母性的であれば、子ども達の悲哀感情による様々な問題も表現されることなく生活できることが示唆された。彼は「セパレーションそれ自体が要因ではなく、ボンド形成のある種の歪みや崩壊が決定的な役割を果たしている」(Rutter, M. 1979 p.60)として、必ずしも施設で生活することのみに問題があるというのではないことが報告され、それは、現実的な原因によって母親との関係が余儀なくされた子どもに限らず、母親が適切なかかわりを子どもとの関係の中で結ばなかったときに起こってくる特徴的な行動特性であるとされた。必ずしも、現実的な母性の不在のみを意味するのではなく施設症を意味する hospitalism という言葉は不適切な表現であるとされた。その点ではネグレクト虐待には maternal deprivation による愛着傷害を抱えているということも考えられる。

子どもの行動特性として、抑圧された怒りの感情、一人遊び、独り言、脱人格的対人関係、脱感情的容貌、対人関係の深刻な問題が報告されている。しかし、これらの行動はネグレクト虐待とされるすべての子どもに見られる普遍的、非可逆的な障害とはいえず、それぞれの子どもに応じて、症状の出現には

違いがある。それぞれの子どもの家族背景を見ると、ネグレクト状況におかれるにいたった時期や、その内容、個人の資質、親の子どもへの対応（たとえネグレクトであるとしても、何らかの形で子どもへのメッセージの型）によって違いがある。生後数ヶ月からネグレクトを受けた子どもは、身体的に小さく、また、対人関係、知的な成長においても著しく低く、問題が見られた。幼児期の早い時期にネグレクトにいたった子どもは、対人関係にそれほど大きな問題をもたず、逆に極端な愛着行動が見られる（Cynthia, C2005 pp.77-78）。さらに、実際に施設に入所してから見られる彼らの行動には、ネグレクトを人生の早い時期に体験した子どもについては、著しく、対人関係に傷害が見られ、一見したところ、自閉的な状況に陥っている子どもも見られ、また、子ども同士の関係も全くとらないか、あるいは、自分自身の内的な世界に埋没してしまっている状況が見られるのに対して、親との愛着関係がある程度確立されての後にネグレクトにいたった子どもについては、むしろ、取り去られた愛着欲求を取り戻すかのような行動をその職員との関係の中で見せると同時に、生活場面でも肯定的な自己像を表現しながらも心理療法場面では非常に攻撃的でどちらかという、治療者に対して否定的で、拒否的、あるいは劣等な状況になってしまっている自己イメージを、再構築するかのように、ゲーム等の遊びの勝敗にこだわる姿が見られる。

事例 1

Aは、ネグレクトをされていた姉妹の一番上で、下に4人いる兄弟の長女である。Aは、ネグレクトが原因で、十分な教育も受けさせてもらわずに、学力も極端に低く、小学校6年の年齢でありながら、小学校2年程度の能力しか持ち合わせていなかった。しかし、生活上のことで、弟や妹に対しては、職員が驚くほど、面倒見がよく、また、まるで母親のようなかわりをしていた。しかし、何らかの圧力が子どもにかかっているであろうことが予測され、治療場面にくるようになった。初期の間は、生活場面と同じように、いい子でいたが、セラピーが10回を越えるころから次第に、治療者に対して攻撃的になり、また、治療者がすることに対しても批判的、拒否的な態度を見せるようになった。しかし、そうでありながらセラピー場面には休むことなく訪れ、生活場面の肯定的な像と、セラピー場面での否定的な部分とを交互に見せていた。

ネグレクトをする親は、子どもが生まれた当初、子どもに否定的な関わり、あるいは子どもを意識的に拒否しようとしたと考えるよりは、個人の内的な要因、家族の要因、経済的要因、親自身の病的な要因（Wolfe, D. A. 1999 p.22）

によって結果的にネグレクト状況に陥ってしまったと考えられるケースは少なくない。さらに施設入所児童の成育歴をみると家族の崩壊、障害を持った子どもの誕生、あるいはその他の社会的な要因（父親の拘留、親の死による兄弟だけの生活の中にいる幼少の子ども）が加わることによって、子どもへの養育に問題をきたしてしまった姿であるとみることもできよう。すなわち、母親は当初、子どもへの、それなりの愛情を向けてはいたが、これらの要因が降りかかることによって、子どもへの注意が向かずネグレクト状態におかざるを得なくなってしまうことが考えられる。中には親の持つ精神病がネグレクト的対応に手を貸していることも多くある。さらに、また、その親たちの持つ対人関係のまずさと、そういった親たちに対する地域ケアの不足が、親に子どもの養育放棄をさせる原因を作っていることも考える必要がある。母が子どもを持ったその初期は、当然未熟なスタイルでの子育てしかできず、さらに、精神的に未熟な親にとっては、子どもの泣き声そのものが恐怖の材料になっていることがある。そのため、育児ノイローゼに陥る母親も少なくない。かつて、地域でのコミュニティーが成り立っていたころでは、近所の様々な出来事は、その地域の問題として考えられ、それぞれの構成メンバーである近隣の人々がそれぞれの子育てについても、未熟な家族に対して具体的な援助が行われ、あるいは、経験者による子育て法の伝達が行われていた。また、地域の母親たちの自然発生的な協力関係は子育てによる母親の不安や、恐怖をある程度軽減させるのに手を貸してくれていたが、現在の虐待の増加とも関係のあると思われる対人関係の希薄さは結局、親の不安を募らせることになり、未熟な子育てをする親に対しての援助の極端な少なさを生み出し、次第に、親たちの問題行動とされる養育上の問題が噴出することになった。これらの虐待の問題を、単純に一家庭の中で起こっている、特別な環境、特別な人間による問題のある行為であるとすることはできず、より大きな視点から現代の様相を考えていかねばならない。その中で、ネグレクトは、親の子どもの養育放棄を意味するものではあるが、それは、子どもの誕生そのものを肯定的なものとしてとらえることができず、初期の段階から放棄してしまっているのではなく、また前述の要因があったとしても簡単に養育を放棄するというものでもない。施設に入ってくる子どものネグレクト虐待を含めた、すべての虐待は、子どもが親にとって手のかかる年代になったころから始まることが多く、ネグレクトは発見に数年かかっていることが多い（生後2～3年）。

ネグレクト虐待について、ウルフは(1) 身体的ネグレクト、(2) 情緒的ネグ

レクト, (3) 教育的ネグレクトに分類し, (Wolfe, D.A. 1999 p.10) それぞれの持つ行動特性, 心理的特性を整理した。また, ポランスキー (Polansky, N.1978) は, 生活場面における不適切な養育の態度, 一貫性のない混乱したかわり, 日常の養育の怠慢についてさえもネグレクト虐待として, その虐待スタイルの仲間に取り入れている。

(1) 身体的ネグレクト

ウルフは身体的ネグレクトを, 子どもの健康のケアに対する怠慢や拒否, 家からの追い出し, 家の中への閉じ込め, 不適當な援助と定義している (Wolfe, D.A. 1999 p.5)。またジョフは子どもの成長に対する拒否, 基本的な物質的要求を満たすことに対する不十分な援助, 見限り, および放棄を含む (Joffe, M. 2002) としている。

身体的ネグレクトは児童養護施設に救い上げられる顕著な例といえるであろう。子どもの養育にかかわる, 食事, 風呂, 服装などの身体的な養育の放棄, 拒否を意味し, 発見されたときには大抵, 栄養失調状態, 不潔な髪の毛, 皮膚, 放置されたオムツかぶれ, 皮膚の湿疹など食事, 清潔に関しての養育の怠惰, あるいは拒否の見られることが多い。そのため, 病院に運び込まれたり, かなり目立つ様相, 行動などから発見されることは多い。そのため, 比較的早期に発見されることになり, 施設入所が決定される。また, 身体的なネグレクトは心理的, 教育的なネグレクトも同時に含まれていることもあり, 知的な能力や, 対人関係に問題をもたらすことになり多くの問題行動が観察される。また, 子どもはネグレクト的な対応が継続することによって次第に, 対人関係の問題は固定され, さらに, ソーシャルスキルについても, 生活上の平均的スキルが伝達されていないことによる, 社会的行動の欠如が見られることが多い。これらの原因になるのは, 未熟な母親の養育の拒否が見られるが, 必ずしも, 拒否によるものだけではない。児童養護施設に入所してくる子どもたちの生活背景は不安定であるのは一般的で, 極端な貧困や, 親の病理, 親の習癖 (薬物, アルコールへの依存, 頻回にわたる親の触犯行為による拘留) によるネグレクト状態がみられる。それらは, 積極的なネグレクトというより間接的なネグレクト状態を作りだしている状況であるといわねばならない。状況によっては, 保健師による訪問, 親の精神的な病理に対する治療的アプローチ, 近隣の人々による声かけ, あるいは具体的なアプローチによってかなり助けられた部分のあることは事実である。

事例 2

Bは、身体的ネグレクトが疑われ施設措置がなされた。しかし、児童福祉の領域で救われたのにもかかわらず、Bは自宅に帰りたがり、家出までして自宅に戻ろうとした。施設の中で、ネグレクトに伴うパーソナリティー上の問題はあまり見られず、むしろ、人懐っこく、誰に対しても様々な気を使う子どもでもあった。妹と共に家出をし、自宅に帰っているであろうことを予測し自宅に行くと扉は硬く閉ざされ、誰が訪れても簡単には扉を開けてくれず、数回にわたる訪問と、忍耐強い声かけにやっと扉を開けてくれた。夏であるのに関わらず、雨戸が閉められ、代金滞納のために、ガス、電気は止められ真っ暗な状態であった。しかも、長い間掃除をされていない部屋は訪問してもとても靴を脱いであがろうとは思えないほどにごみが家の中を占めていた。ごみの上で生活をしている状態になっていた。その部屋の奥に兄弟は息を潜めていた。母親はうつ病で、自分自身の世話さえも十分にはできる状況ではなく、しかし、子どもには愛情があり、家出をしてきた子どもを施設に戻すことに抵抗していた。また、子どもたちも施設に帰ることに対しては拒否的、母親と共にいることを希望した。

Bの母親は精神的に問題を抱えており、しかも、それゆえに貧困で、病院にも自らでかけていくだけのエネルギーもなく、また交通費さえも出せる状況ではなかった。かつてはそれなりに仕事をし、たくわえもあったが、病気になってから何度か行った病院も、次第にいけなくなっていくと同時に、家庭生活でも、子どもの世話や自分自身の世話さえもできなくなり、いわゆる子どもの身体的ネグレクト状況へと陥ることになった。また、そのために、近隣との人間関係ももてず、逆に、人間関係を恐れ拒否するまでに悪化することで、外来者への拒否、部屋の中への引きこもりの状態になってしまった。子どもたちの服装、栄養、食事の面倒にも滞りをみせ、ネグレクト虐待の認定がなされることとなった。

子どもたちの状況を見ると、ネグレクト虐待の子どもにみられる、心理的、行動上の諸特性はあまり見られず、逆に愛着行動さえ見せることもあり、彼らが幼少期において、何らかの形で、愛情を受けた体験を有していることが想像された。

一般的に我々の生活の中では子どもを中心として、その生活がスタートし、子どもがある程度の年齢になるまでは、親が子どもに対して適当な教育、しつけをする義務があり、また、愛情深い関わりをすることで、子どもが将来的に

社会と関わる際に、適応的に関わることのできるパーソナリティーを成長させる責任がある。ネグレクトはその放棄を意味するが、Bの親の場合は単純に母親を責めるわけにはいかない。また、子どもたちも、母親に愛情を感じていることを考え合わせるなら、子どもは身体的には母親の病気ゆえに十分なケアを受けていないことはわかるが、しかし、精神的には愛情深い関わりを受けていることが考えられ、もう少し、病理に対する理解、積極的な公的機関のアプローチ、社会的資源の利用があれば、子どもとの生活を維持できた可能性がある。また、この際に、子どもが母親に縛りつけられ、動くことができなくさせられているという、一般的な虐待の親と子との関係ではないことも想像される。すなわち、子どもが親を求めている姿が十分に観察される場合彼らは親からの愛情深いかわりの体験があり、しかも、その要求を他者に向けることのできるパーソナリティー特性は、それを裏づけていると思われる。しかも、そうすることで、自分が他者に認められることを求めていることが考えられる。身体的なネグレクトの場合、子どもには、知的な遅れ、状況によっては言語の遅れなどの障害が認められることが多い。また、この場合、子どもは親から十分な教育は受けていず、特にソーシャルスキルにおいて遅れが見られるか、あるいは身体的にも低体重、低身長が多い。また、長年の栄養不足は歯の成長にも影響をあたえることになり、歯の成長が阻害され、さらに、骨の成長や、その他の様々の分野において、身体的成長に影響を及ぼすことが多い。ネグレクトの場合はこれら精神的、教育的、身体的ネグレクトの3つの状況がそれぞれ単独で存在しているだけではなく、大抵の場合はそれらが混在している。そのため、ネグレクト全体の共通する特徴的な行動がなされることも多い。このように、身体的なネグレクトは親が子どもを拒否したというだけではなく、子どもへの注意が十分にいきわたらない外的な原因が見られる。

(2) 心理的ネグレクト

ウルフは、心理的ネグレクトには、子どものニードや愛情に応じた行動、子どもの心理的な欲求に対する拒否や不全、子どものことについての配偶者への虐待、子どもの薬物使用やアルコール使用に対する寛容な態度が含まれる。

(Wolfe, D. A. 1999 p.9)

エリクソンやエジェランドは養育者が、子どもの重大な感情あるいは行動傷害に貢献することを拒絶する、子供の感情のニーズに対する不注意と精神衛生の無視に関係している (Erickson, M. F. and Egeland, B. 2002) とする。

身体的ネグレクトに比べると比較的発見が難しい。というのも、心理的ネグレクトはそれとして確定することも難しく、また、外的なところでは、子どもへの金銭的、身体的なケアは十分になされていることが多いために、初期に発見されることは少ない。心理的ネグレクトが疑われるとき、子どもの社会的な問題行動があらわれたときに初めて明らかになることが多い。子どもの社会的な問題には、こういった心理的ネグレクトが隠されていることが考えられる。

事例 3

Cは不登校、徘徊、非行行動を主訴として心理療法を受けに訪れた。母親と共に面接室にくる。母親は、子どものこれらの行動について、いかにも汚いものを見るかのように子どもを見、また自分が子どものためにどれだけ一生懸命に働いてきたかを語った。子どもも、自分の行動を反省し、母親に対して自分は悪いことをしてしまったことを語った。大人しそうに見えるが何かを秘めている感じはあった。母親との同室面接ののち、平行面接に形態を変え、子どもとのみの面接を開始すると、子どもから母親について以下のようなことが語られた。

母親は確かに、自分のために働き、何でも買ってくれ、何不自由なくここまでできた。近隣の人にも優しく、面倒見がいいことで評判でもある。しかし、自分は幼少の頃から母との関係で何らかの違和感を感じていた。そのことに気づいたのは不登校を始める少し前のことであった。確かに母は面倒見がいい、でもそれが、自己満足のための面倒見なんだということに自分は気づいてしまった。母は自分が思ったとおりに周りが動かないと気がすまない人で、私から母に発する言葉はいつも食い違っており、とらえられていた。私が母を求めて呼んでも、母はいつも後ろ姿であった。母に助けを求めてもガラスの向こうで、こちらに顔も向けずに他の人と話をしていた。不登校になって、母親はあちらこちらの治療室を探し歩き、あちこちにいかされた。悪霊が取り付いてるとのことで、拝んでもらったこともあった。しかし、一向によくならず、自分はやはり母は自分の思ったとおりにしか歩かない人なんだと思い知った。自分はガラスをたたいたり、引っかいたりしながら母に訴えたが母はそれには耳を貸さずというか、母には届いてないようで、私の本当の欲求は常に無視され続けた。それでも、近隣の人との相談を受けている母は自分は子どものことは良くわかっているという幻想に取り付かれていた。自分は母に気持ちを向けるのではなく、何らかの行動を起こさない限り、自分に気づいてくれないであろうという不安

に駆られ、つかまると反応してくれる母親を求めて行動していた。母のいうとおりにはしておかないと、おそらく、母は自分を無視してしまうであろうという恐怖のため、言いなりに動くことを選んだ、そのうちに学校にいけなくなり、昼間外にいと他の子ども達は学校にいつている時間でもあるためか、補導された。

心理的ネグレクトは、ネグレクトをしている側もそれがネグレクトであるという認識のない場合がある。シンシアは母親が鈍感で子どもの様々な情緒的な欲求に対して適切に反応できないことが原因して、情緒的ネグレクトが起こることを述べている (Cynthia, C. 2003 p.89)。親は一見、子どものために一生懸命、あるときには一生懸命すぎるぐらいに関わっているときさえある。しかし、それは、親の思いを中心に動いているものであって、ケアの対象を主体としていないことが多い。ナルシスティックな愛情は子どもの要求すること、子どもの声かけに適当に応えること、また、子どもが要求することとは違ったものを子どもに返そうとすることにつながる。

このように、親は子どものこの訴えに対して鈍感で、あるいは、なんらかの要因によって、その子どもからの刺激に対して適当に当を得た反応ができなくさせられているか、あるいは、なんらかの外的な原因によって、子どもに落ち着いて、時間をかけて関わることができなくさせられ、それゆえに、子どもが大人に対して投げかけてくる刺激に対して適当に望ましいかたちで余裕を持って応答することができなくなっている可能性がある。しかし、この場合、親は子どもに対して積極的にネグレクトを行おうとしたのではなく、それらの要因が重なることによって、虐待者自身も気づかないまま行われてしまっていることが多い。それは、親自身の過去の生活の中で培ってきた人間関係のスタイルに根ざしているものもあらうと考えられる (対人関係システム 2004 森田)。

事例 4

中学2年のDは小学校の高学年から学校への行き渋りが始まり、中学1年になると学校を度々休むようになる。2学期になると、ほとんど学校へ顔を出すことができなくなり、中学2年では全く学校へは行かなくなってしまった。親と子の平行面接をはじめ、母親の面接を筆者が担当した。母親は、子どもが学校に行けなくなったのは自分に責任があるという。というのも、かつて自分も不登校になりかけたが、なんとか、立ち直ってきた。それを考えてみると自分のアプローチは自分の母親にそっくりで、自分でも恐ろしくなるというものであった。そのアプローチが自分を不登校にしたのだから、自分も子どもを不登

校にしてしまう可能性は大きいとのこと。どこが似ているかというと、子どもがいろいろ話しかけてくるのだけれど、いい加減に聴いてしまっている、いけないと思いながらも、子どもの話より、自分が今やっていることに一生懸命で、それでも、拒否するのではなく、聞かないといけないと思っているから、いい加減な聴き方になってしまう。かつて自分も母親にそんな印象を持ったことがあった。母親は小学校の教師をしていた。運動会や参観日は親の仕事の関係上時期が重なり出てくるができない。そのため、自分はいつも寂しい思いをしていた。そして親は家に帰ってきてても、いつも机の前で学校から持って帰ってきた仕事をしている。私が話しかけても生返事で、全く聞いていない。そのくせ自分が私たちに要求することはちゃんと言うことを聞かないと、すごい勢いで叱られた。そういったことが続いたとき毎朝腹痛に襲われるようになって、学校に行けなくなってしまった。それから数ヶ月不登校状態になって、何でそこを抜け出せたのかわからないが、こんなことをしていてもしかたがないと思って、学校に行くようにした。そして、今、自分があの子に自分の母親と同じ態度をとっていることを、あの子が不登校になってから気がついた。それまで、この子は私の邪魔をする子だと思っていたが、自分がこの子のためにちゃんとしてやれなかったと気がついた。と述べた。母親は、ここで始めて自分が子どもに対して心理的ネグレクトを行っていたことに気づくことになる。

家族は、特有の文化を連綿とその子孫に伝えていく、その時代の文化や、新たに加わる配偶者の文化によって多少の違いができれば根本的にはその文化は大きく変容することは少ない。そのため、そこに、世代間伝達が成立する。ネグレクトという深刻な虐待は、その世代だけで終わらずに、そういった関わりを受けた親たちは、また子どもにその関わり方で接することになることがある。しかし、それは、親自身がそのかかわり方がネグレクトにあたり、否定的な関わり方であることを知ることができ、しかも、それを自覚することができれば、否定的な関わり方は減少し、関係の回復を望むことができる。しかし、心理的ネグレクトのように、加害者自身が自覚をもてなかったとき、そのアプローチはその個人の文化から取り払われることはなく、連綿と続けられることになる。そして、その子孫が今回のような非社会的な行動が起こったとき、それに気づく。こういったネグレクトは親自身の自覚が生まれ、それを修正しようと努力を始めたときにこの悪循環の輪は断ち切れる。したがって、世代間伝達は、これらの不適切なかかわりがかつて自分の生活の中にあり、親自身がそれを体験し、そこで得た否定的な感情を思い起こすことで、その伝達のつなが

りを切断していくのである。

(3) 教育的ネグレクト

教育的ネグレクトについて、ウルフは、慢性的登校拒否に対して、学校に行くことを要求しない、また、子どもの能力に関わらず強制的に学校の教育を受けさせること、特殊教育を必要とする子どもに対してふさわしい教育を受けさせないことをあげている (Wolfe, D. A. 1999 p.9)。またジョフは子どもの不登校に対して学校へ行かせることに対してその援助をしないあるいは、特殊教育の必要性に対して無頓着である (Joffe, M. 2002) 場合に教育的ネグレクト成立する。その多くの原因が家族の貧困にあることも述べられており、教育的ネグレクトの原因をその家族だけに求めるのは少々酷であることも考えられよう。しかし、教育の不足は子どもの知的な発達の遅れだけではなく、それによって起こってくる対人関係の問題や、対人関係が劣悪になることによって起こりうる、行動化、衝動のコントロール不足が生じるもととなり、またこれらの状況が子どものパーソナリティーの成長を阻害することになる。ウルフの述べるところによると、教育は子どもの能力に応じて、適切に与えられることを必要としており、それに対して極端な不適切な状況が表れたときにそれを、教育的ネグレクトと称している。とするなら、広義には、知的能力に少々遅れのある子どもに対して歴年齢のみからそれに応じた教育を行うことは、教育的ネグレクトに当たる可能性もある。また、不登校している子どもに対してもはや登校をあきらめ、再登校にむけての努力を怠ることも教育的ネグレクトに当たるかもしれない。

2 ネグレクトを受けた子どもの行動特性

ネグレクトを受けた子どもの特性として、

発達障害の問題： 1) 愛情関係の欠乏・歪み 2) 基本的信頼感の欠乏 3) 受容されている感覚の欠乏 4) 万能感の欠乏 5) 発達刺激の欠乏 6) 構造の欠乏、

精神症状： 1) 精神活動の低下 (精神発達の遅れ、感情の極端な抑圧、抑鬱) 2) 自己感の発達の障害 (身体感<リズム、食欲>などの障害) 3) 自己境界感覚の障害 4) 自己の連続性の障害 5) 自己の主体性の障害 6) 自尊感情の障害 7) 偽成熟 8) 自己刺激行動 9) 自己調整能力の障害 10) 易興奮性 11) 満足感の障害 (過食、早食い、隠れ食い、盗み、万引き)

12) 他者関係能力の障害（無差別的愛着，希求と回避の混在，共感性の低下）
（奥山 2001）

がみられる。これらの特性に加えて，さらに生活場面では以下に示す特徴が顕著である。

① 架空の人物の存在

1人遊びの中に，現実には存在しない対象を作り上げ，あたかも二人で遊んでいるかのようにする。

② 脱感情化された対象（道具的对象化）

人とのかわりにおいて，相手を感情を持った存在として扱わず，自分の現実的欲求を満足させるためのみに相手を利用しようとする。

③ 一人遊び

他者とのかわりを避け，1人で遊ぶことを好み集団になじんでいこうとしない。

④ 時に極端な愛着行動

子どものネグレクトがいつごろどのような状況でなされたかによって違いがあるが，初期の親との関係が成立して後にネグレクトが起こった場合に，取り去られてきた愛情欲求を取り戻すかのように極端に愛情を求める行動をとる。

これらの特性は，生活場面では歓迎されず，時に人との信頼関係を持てずに内界にもぐりこみ自己を守ろうとしている彼らの世界に強引に侵入し，生きるために不安に満ちた自己を危険に満ちた外界に無理やり引っ張り出す危険性を持っている。ネグレクトはトラウマとして彼らの心の世界に何かをもたらしてしまったというよりは，親によって十分に守られず，人との信頼関係を築くことができず，硬い守りを外界との間に築き自己を守ろうとすることでもたらされてしまった特性であると考えることができる。そのため，かわるものは，彼らの恐怖を理解し，彼らが十分に安全感を確かめて後にみずから扉を開けることができるようになるまで，興味を持って待ち続けることが必要である。

3 治療事例

(1) 生育歴

母親は中卒後，ホステス，売春などで生活。父親はわからず，不安定な生活のため本児については詳細は不明。A市，B市で浮浪し，C市で浮浪生活をしているところに保護され，母子自立支援施設に入所，しかし，母親が病気で緊急入院のため，本児と弟は児童養護施設入所となる。

本児出産後、母は浮浪し、本児を乳母車にいれ、徘徊する。本児への直接のかかわりはほとんどなく、子どもにとっての生活領域は乳母車の中だけという状態であった。母親の生活状況から子どもたちは母親に連れられてはいたが、身体的、教育的、情緒的ネグレクトが想像される。

(2) クライエント

3歳女兒、言語発達が極端に遅れており、3歳の段階で言語発達のレベルはジャーゴン期でとどまっており、抱きつき行動がなく、視線が合わず、精神科の診断では自閉症とされた。また、知的な遅れもみられ保育士の問いかけに対してもほとんど反応はなく、コミュニケーションがまったくとれず、ひっきりなしに独り言を続けている。遅れの状況もあって、乳児院での世話を受けることになる。まだおしめがとれず、蟹股で足をひらいてゴリラのような歩き方をする。

(3) 主訴

言語発達の遅れ、独語（ジャーゴン期にあり、意味不明の言葉で話す）自閉傾向（精神科の診断による）

(4) 治療過程

「」はクライエントWの言葉　〈〉はセラピストの言葉

I 期初回～16回

セラピスト（以後 Th. とする）は本児を乳児院まで迎えにいき、抱いてプレイルームまでつれてくる。Wは乳児院から Th. にたくされても、初対面の Th. に対しても特別な反応もなく、また、恐れることもなく、抱かれる（Wのセラピーの際には常に乳児院への送り迎えを抱いて続ける）。しかし、腕をかけることもなく、両手を脇にだらんとたらしめている。Th. と顔を合わすこともなく、視線は Th. とは違った方向に向けられ、目を合わすことはない。プレイルームにはいると、目に付く玩具を次々に一旦だしてはすぐに元あった場所に片付ける。レジスターのカードは上下左右をきっちり合わせて片付けていく。電話を出しては、独り言で何かをはなしている。うなづいたり、電話の内容を聞いているかのように「うん」「うん」といったかと思うと、すぐに、W特有の言葉で話しかける。Th. はWのそばにいるが、その存在をまったく無視して遊び続け、放り出されてしまったかのような感覚を持たされる。Th. は、Wのわけのわからない話し方をまね、Th. を意識しないWに応じる。3回を過ぎるころから、徐々に話し言葉に具体的な意味と思われるものが見られるようになる。最初の言葉として「アーン」（あたし）「アータン」（あかち

ちゃん)「オアータン」(おかあさん)と想像されるような言葉と、それにあった行動をする。Wの背中をさすり〈アータンは元気?〉とたずねると顔をほころばせ、赤ちゃん人形をもってくる。4回には、クリームとシッカロールを顔に塗り、お化粧をしているかのようにする。乳児院では保育士がお化粧をすることはなく、この行動がかつて母親がしていた行動を見ていたことをうかがわせる。4回以降相変わらずの独語があるものの、言葉を使わず表情、動作を用いて Th. に示し、Th. はそれを察知して動くようにする。Th. の声掛けにも反応を示すようになり、例えば、赤ん坊を乗せたゆりかごをゆらしながら子守唄を歌うと、Th. の顔をみて微笑む。当初、Th. の存在をまったく頓着しなかったWの世界に、Th. の存在が意識されるようになる。8回には Th. にお茶を振舞ってくれたり、ままごとで、Th. の食事も準備してくれるようになる。さらに、Th. に“高い高い”を要求し、甘えを見せ始める。このころ、Th. にまったくしがみつかなかったWが抱いた際に Th. の方に片手をかけるようになる。また、両手をセラピストに手をかけながら、乳児院からプレイルームまでの間にあるものを指差し、W特有の言葉で名前を言っている。Th. はそれに対して、正しい名前を繰り返して言っていくようにする。プレイルームに入ると、玩具を持ち遊びにいは、Th. のところにきてしがみつき、しばらくじっとしてからまた離れて遊びにいくことを繰り返す。10回以降13回まで赤ちゃん人形のおしめを変えたり、抱っこをしてゆらしたりをする。「お母さん」「赤ちゃん」という言葉は次第にはっきりといえるようになり、また目的的に用いることができるようになる。しかし、依然として自閉的な世界は残存しており、“声の絵本”のレコードを聞いているときにはレコードの内容を聞いているというよりは、次々にレコードを重ねていくことにこだわり、同じ行動を繰り返す。このころWはしっかりとセラピストに抱きつき、さらに、乳児院に迎えにいくと、Th. の顔をしっかりと認知し、抱かれることを要求する行動をするようになる。

Ⅱ期17回～40回

Th. に抱かれる仕方がうまくなり、以前にあった重さがなくなる。さらに、指をさして言う名前も不完全ではあるがわかるようになる。電話を使って話している言葉が本児独特の言葉であるにしても、そのイントネーション、リズムが保育士がインターフォンで話している話方に似ており、Wが保育士の言葉に興味を示していることがわかる。カルタを見ると、自分の知っているものがでてくると、その名前を即座に言う。また、Th. の言葉も注意深く聴いており、

まねようとする。19回、21回には、マイクを持って話をし（W独特の言葉）Th. にマイクを向け話をさせる。そして、また自分にマイクを向け話をし、また Th. に向けるというように交互に話をするようになる。退室時、鏡の前で顔にクリームをぬり、髪の毛をとかしてからでるようになる。また、今まで、玩具を出しては片付け、出しては片づけを繰り返し、自閉症児特有の同一性の保持が見られたが、このころから出した玩具を片付けることなく放置することもできるようになり、この特性が緩和されてきていることが伺えた。28回から Th. をおとうちゃんとよぶようになる。Wにとって父親は体験がなく、Th. をWにとって親密な対象であることを意識し始めているように思えた。同一性の保持は緩和されたものの、相変わらず“声の絵本”ではレコードを重ねることに固執し、また独語もかなりみられた。しかし、この独語におとうちゃんという言葉が組み込まれており、電話で話をしているときに、Th. のことをあるいは、Th. に話をしているかのような会話が聞かれるようになる。マイクに対しての興味は強く、常に一度はマイクを持って交互に話すプレイをする。Th. はWの言葉を真似て同じような話し方で答えると、また、Wが特有の話し方で対応するという具合に話し合いが行われる。乳児院で、Th. はおとうちゃんではなく、Mさんであるということをおしえてもらったのか、以後 Th. の名前を呼ぶようになる。乳児院でWは保育士や他の子どもに興味をしめすようになり、頻繁に話しかけ、他児にもかかわりを見せるようになる。人形を用いたプレイでは、赤ん坊の人形だけではなく、男性の人形女性の人形赤ちゃんの人形をそれぞれベッドに寝かせ、はっきりと「ねんね」という。Th. が〈ねんね?〉と聞き返すと「うん、ねんね」とはっきり答えることができるようになり、Th. とのコミュニケーションが成立するようになる。キティハウスをだして、ブランコに父親人形、母親人形を乗せてゆらせ、また、男の子人形、父親人形と一緒にブランコに乗せてゆらす。また、テーブルを準備し、父親、母親、男の子、女の子の人形を座らせ家族団らんさながらの様子を見せる。この4人の人形はおじちゃん、おかあちゃん、キティちゃん、女の子と命名して並べる。39回に Th. にクレヨンをわたし、おかあさん、おとうさん、Wちゃんを描かせる。40回には Th. の描いた人の絵の横に人間の顔らしきものを描く。しかし、まだ、目、鼻、口はついていない。人間に対する興味、性の分類がなされるようになる。また、自分の周りにいるすべての人に興味を示しはじめ、依然としてW独特の言葉ではあるが話しかけるようになる。自分1人の世界で独語を使って遊んでいたWが、他者に興味を示し、徐々

に外に向かって動き出した。このⅡ期の終わりに、Th.の小指にハートの指輪をはめてくれる。

Ⅲ期41回～66回

話し方がはっきりするようになり、また語彙数も増加し、プレイルームにある動物の人形のほぼすべてその名前を正確に言えるようになる。また、果物、野菜の名前も正確に言えるようになる。一つ一つの名前をいいながら乳母車の中に入れていく。赤ん坊人形をTh.のひざに乗せ、それに布団をかけ、哺乳瓶を使って授乳する。“声の絵本”のレコードに対する固執は依然残っているものの、家具、食器に興味を示し、テーブルに並べたり、2組の食器を準備してTh.と食事をする。パズル、人形の着せ替え、お絵かきを1人でしようとする。また、檻にはいつている動物の出し入れに固執する。このころ、冬休み中に絵を描いたり、字を書いたりすることが増加し、テレビの子ども番組のキャラクターの絵を描くようになる。55回ころから、今までレコードを無意味に重ねていた“声の絵本”にききいるようになり、それにあわせて、同じように話そうと努力するようになり、Th.に紙芝居のように絵を見せながら、お話にあわせていく。さらに自己主張も強くなり、退室を渋るようになる。

『このころ、週末里親が決まり、毎週土曜日から日曜日に里親の家で一泊するようになる。また、プレイの送り迎えでは、抱っこを嫌がり手をつないでいくことを要求する』

今まで用いていた玩具を全部テーブルの上に山にする。プレイルーム内のパズル全部に挑戦する。

この頃、乳児院から児童養護施設のほうに措置変更となり、年齢相応の生活環境になる。

Ⅳ期67回～72回

以前のように間断なく、W独特の言葉で話すのではなく、少ない言葉ではあるが、わかりやすく話せるようになる。顔にクリームをぬり、シッカロールをぬり、それをティッシュでふき取り色の消えるのを見て〈消えた?〉「うん、消えた」、びっくり箱のピエロを飛び出させ、「もう、またでできた。中に入ってください」と押し込む。また飛び出させては「中に入ってください」と押し込む。子ども図鑑を開き、同室の子どもの名前をつかって「〇〇ちゃんのせみ」と呼んでいく。レコードに対する固執も取れ始め、聞いているだけではなく、自ら音量、スピードを変えて聞こえ方の違いを確かめるようになり、固執した傾向は取れ始め、自由度が増していった。と共に、生活環境も変化し、自閉の

世界から脱出することができた。72回を最後に、小学校が施設内に併設している施設への措置変更が決まる。

その後、Wは小学校を特に問題もなく卒業し、中学では、演劇部の部長を務めた。その後高校に進学し（当時施設の子どもが高校に進学するのは珍しく、中学での成績が良くないと進学は難しい）卒業後企業へ就職した。

(5) 考察

Wは母親の浮浪のため、十分な母性的なケアを受けることができず、ネグレクトの状況におかれていたことが想像される。そのため、母親との肯定的な対象関係が成立させることができず、言語、知能、認知、ソーシャルスキルに遅れを持つことになり、さらに人間に対する興味も持たなくなり、たった1人の自閉的世界に埋没することになった。そのため、自閉症児の示す特徴を持ち、独語、道具的対象化、同一性の保持、言語の遅れ、抱きつき行動、アイコンタクトがもてない、対人関係の障害などをもつことになった。プレイセラピーでは、セラピストは身体接触を持つことに努め、子どもの言語発達レベルに応じてコミュニケーションをとるよう努力した。当初、Wはそうした Th. に興味を示さずに、相変わらず自閉的世界に埋没していたが、次第に、その他者である Th. を意識し始め、興味を示すようになった。ネグレクトは様々な原因によって親のケアが取り去られてしまうことによって、人間との関係が十分にできずもはや他者への興味を失うことになり、さらに、集団になじんでいかないために、周囲の他者もその子どもにかかわっていくことを避けるようになり、悪循環の輪が成立することで子どもはさらにネグレクトの世界に陥れられることになる。この悪循環は、子どもがネグレクト虐待によってもたらされてしまったパーソナリティーの特性が更なるネグレクトを生み出すことになり、子どもは重ねてネグレクト状況におかれる。これらの特性は、ケアを受けることのできなかった子どもたちの防衛的な態度を強めることに似ている。そのため、他者に対してオープンになることができず、自己の世界に埋没し、他者とのかかわりを持たなくなってしまうことになる。子どものこの自閉的な世界にかかわりを持とうとするセラピストはまるで存在しないかのように扱われ、興味をもたれていない感覚の中で、子どもは目の前にいながら、放っておかれた感覚になる。セラピストは子どもの堅く閉じられた扉を前にして、常に興味を持ちながら忍耐強くかかわり続けることが必要になる。次第に子どもが扉を開くことを待つことが重要である。本事例の子どもは強固な扉で心の世界を閉ざし、他者との関係を持たず、そのためにコミュニケーションの手段も失い言語

の発達に問題をもつことになってしまった。しかし、本事例の中でも見られるように、彼らが外界に対してまったく興味を失ってしまっているわけではなく、少ないながらも興味を示していることがわかる。ただ、直接かかわってくる対象を彼らがもてないままでは、その内的な世界に安住することで次第に開かずの扉は固定されてしまう。早いうちに彼らに興味を示し、かかわりを持とうとする対象に出会えることが、彼らのネグレクトによってもたらされることになった特性から救い出せる要素になる。

参考文献

- Crosson-Tower, C. (2005) *Understanding Child Abuse and Neglect Sixth Edition*, Person A & B, Boston.
- 森田喜治 (2006) 「児童養護施設と被虐待児」 創元社
- 森田喜治・東山紘久 (1996) 「養護施設内精神遅滞児のプレイセラピー」 大阪教育大学養護教育教室研究紀要第8号
- Rutter, M. (1972) *Maternal Deprivation Reassessed* Penguin Press
- 北見芳雄他著 (1979) 訳「母親剝奪理論の功罪」 誠信書房
- 斎藤 学 (1994) 「児童虐待」(危機介入編) 金剛出版
- Wolfe, D. A. (1999) *Child Abuse: Implication for Child Development and Psychopathology*. Sage Publication Inc. London

キーワード 虐待, ネグレクト, 遊戯療法, 児童養護施設